



～ 夢ひとすじに ～
宮原中だより
学び 磨き 鍛え 羽ばたけ

平成 29 年度 第 4 号
平成 29 年 7 月 3 日 (月) 発行
さいたま市立宮原中学校
メールアドレス
miyahara-j@saitama-city.ed.jp
ホームページアドレス
<http://miyahara-j.saitama-city.ed.jp/>

ことわり
「理十五で未決まる！」

校長 小林 広利

家の近くを愛犬と散歩していた頃のことを思い出しました。同じ犬種の飼い主さんとは、自然と声を掛け合うことが多くあります。違う犬種の飼い主さんとも挨拶をかわすことがありますが、犬同士が吠えあったりすると、目配せで「すみません」とも伝えます。やはり、単に黙ってすれ違うよりは、気持ちの良いものです。先日、読んだ「江戸しぐさ」という本の中に次のようなことが書いてありました。

「七三の道」：道の真ん中を歩くのではなく、自分が歩くのは道の3割、残りの7割は他人のため、緊急時のために空けておきなさい。

確かに、前方から犬を散歩している人が来ると、私も愛犬を道の脇に寄せながら歩きます。江戸しぐさでいえば「七三の道」でしょうか。他にも、学びたい「江戸しぐさ」がありましたので一部を紹介します。

「うかつあやまり」：例えば相手に自分の足を踏まれたときに、「すみません、こちらがうかつでした」と自分が謝ることで、その場の雰囲気をよく保つこと。

「時泥棒」：約束の時間に遅れるなどで相手の時間を奪うのは重い罪（十両の罪）にあたる。

「こぶし腰浮かせ」：乗合船などで後から来る人のためにこぶし一つ分、腰を浮かせて席を作る。

江戸の町は、18世紀初頭にはその人口100万人を超え、世界最大規模の大きさの都市でした。江戸の市街地の大半は武家の住居で占められており、江戸の人口の大半を占める町民は、限られた地域にひしめき合っていたため、他者に気を使いながら生活をしていました。その生活の中で磨き上げられた江戸っ子の気質こそが、「江戸しぐさ」です。商人の子育てに関し、江戸時代には、こんな言葉もありました。

「三つ心、六つ躰（しつけ）、九つ言葉、文十二、理（ことわり）十五で未決まる」

「三つ心」は、3歳までに子どもたちの人格は決まってしまうから十分に愛情を注いで、人に思いやりのある子に育てなさい。「六つ躰」は、6歳までに挨拶の仕方や箸の持ち方から始まり一通りの躰を済ませておきなさい。「九つ言葉」は、9歳までには、どんな人にも失礼でない言葉遣いができるようにしなさい。

「文十二」は、12歳までに、いろは48文字の手習いから始まり、数字、納品書、請求書、苦情処理書など、様々な用途にわたる手紙の書き方をマスターしておきなさい。「理十五で未決まる」とは、15歳までに、暗記ではなく、こうした諸々のことが理解できるようになっていないと、将来、商人として生きていけません。こんな意味であつたらしい。

皆さんは、12歳から15歳。「理十五で未決まる」の年齢です。是非、多くのことを自分から積極的に学習・体験して身に付けていきましょう。宮原中学校の先生方は、皆さんに一生懸命教えます。また、小学校入学は6歳です。家庭では「三つ心、六つ躰」をしっかりとお願いいたします。

先日、職員玄関に入ると、部活動で生徒たちが、顧問の先生のところにも行っていたのでしょうか。職員玄関には、きれいにそろえられた靴が、一足も乱れることなく並んでいたのです。素晴らしい光景です。

森信三先生が書かれた書籍の中にある次の文面を思い出しました。

○ その学校の教育の程度を知るには、三秒とかからぬ。子どもたちの靴箱の前に立って見るがよい。

○ 教育は観念的なキレイごとではない。言うなれば実に野暮ったいものである。まず紙屑を拾うことから。次に靴箱の靴のかかどが揃うように。真の教育は、こうした眼前の瑣事からスタートする。

この当たり前のことをしっかりと行うことが重要なことです。「靴をそろえる」「挨拶・返事をする」「掃除や整頓をする」「時間を守る」「校歌をしっかりと歌う」「思いやりの心をもつ」、そして「授業をしっかりと受ける」など当たり前のことを当たり前に行うことを土台にして、「理十五で未決まる」を実践できるように、夏休みに向けしっかりと過ごしてもらいたいと思います。



【宮原中学校の職員玄関にて】